発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2−4−1
丸ノ内ビルデング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（212）4007・1447
編集責任者　堀内六郎
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1981年10月25日発行
第13巻　第10号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 13　No. 10号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

スウェーデンその他ヨーロッパ諸国を訪問して

— 高齢化社会視察調査団の旅 —

Visiting to the Old-aged Society Sweden and others

評議員　京都産業大学教授　山上賢一
Prof. Kenichi Yamagami

このたび、はからずもスウェーデンを中心とした、ヨーロッパ諸国の高齢化社会視察調査団の団長の重責を引受け、去る8月23日から9月6日の間5ケ国の視察旅行を行った。

私個人にとっては、8年振りに訪問する福祉国家の先鞭をつけた先進国スウェーデンが如何に高齢化社会に現実にかつ柔軟に対応しているか、そしてすでに完全な成熟社会に達し高度の福祉社会を実現して来ている源流をさぐり、国と地方自治体、および企業の夫々の機能と役割その他の実態を視察することは誠に興味ある課題であった。また以前に社会保障制度に関する翻記をまとめた経験から私にとってはまたとない幸せと思い若輩をかえりみず引受けた次第である。

ストックホルムでは、すでに在日スウェーデン大使館を始め The Swedish Institute の厚いご支援と協力により、スウェーデン滞在中のスケジュールが詳細に設定されており、在瑞20年の練達な通訳も準備していていただいた。SPP（The Swedish Staff Pension Society)を皮切りにアトラス・コプコ、スウェーデン労働組合連盟(LO)、ストックホルム社会福祉局、スウェーデン地方公務員組合（SKTF）、スウェーデン経営者連盟（SAF）、社会省の老人企画委員会、マルメ市サービスハウス、ルンド大学（老人問題専門三教授）等各施設の視察が叶い、各訪問先でゆきとどいたご指導と招待を受け、老令化社会のきびしい現実の中で、「年金制度の新しいこころみ」、「在宅ケアの充実」、「労働組合」、「経営者団体の役割」、権利義務の関係等の調査につき、短期間に予期以上の成果を上げることが出来た。

その他の訪問国においては、デンマーク日本大使館、ドイツ労働総同盟（DGB）、フランスでは職業別協約年金連合会（ARRCO）および高齢化問題研究センター（CLEIRPPA）、イギリスでは労働組合会議（TUC）、保健社会保障省、全英退職準備協会（PRA）等を訪問し、各国の事情について調査する機会を得たが、これらの訪問については日本の総評国際局、在日フランス大使館および英国文化振興会の事前の積極的な準備への協力も忘れることは出来ない。

ともかく高齢化社会の厳しい現実下の日本型福祉社会の建設のために、その得られた多くの示唆を検討し、社会に提言することをもって、今回の調査団の成果としたいと考えている次第である。

目　次

スウェーデンその他ヨーロッパ諸国を訪問して……山上賢一…1
小野寺百合子理事に叙勲……2
高齢化社会視察調査団に参加して……竹原甲三…2
高等教育との結婚（トールステン・フセーン）(1)……中嶋博　訳3
カーリン・アンダーソン女史の来日……6
（研究会ニュース）第3回社会政策研究会……6

小野寺百合子理事に叙勲

Mrs. Yuriko Onodera was decorated with the Polaris-order, the First Class

アンダーソン大臣と小野寺理事

スウェーデン社会研究所理事、北欧文化協会理事小野寺百合子女史に対し、スウェーデン国王は、去る9月12日、勲一等北極星勲章（Nordstjärneorden, första klassen）を授与された。

この勲章の授与式は、スウェーデン大使公邸において、グンナル・ニコラウス・ルーネウス大使、王立ドロットニングホルム・バロック・アンサンブルおよび在日スウェーデン人立会いのもとに、移民・男女平等担当大臣カーリン・アンダーソン女史により行なわれた。

この叙勲は、小野寺百合子氏が夫君の信氏と共に、長年に亘り社会、文化等の広い分野において日瑞両国の知識の交流に努め、親善の向上に貢献されたことに対して行われたものであり、スウェーデンの社会福祉、児童文学をはじめとする各種の分野のわが国への紹介、とくにエレン・ケイの諸著作の翻訳のご偉業は広く周知のところであった。

私ども、スウェーデン社会研究所に関係するものとして、この叙勲に対し心よりご祝意を表明する次第である。

Hjärtligaste tack för ordensdekoration

Fru Yuriko Onodera

この度はからずもスウェーデン国王陛下から勲章を拝受し、身に余る光栄と感激している。だが、この栄誉はわたくし一人だけではなく、わたくしの家族に賜わったものである。わたくしどものスウェーデンとの関係は、1941年以来40年に及び、その間には数えきれないほどのスウェーデン人の良い友だちに恵まれた。その人たちの厚い友情が、この度の栄誉という結果になったことを、心から感謝する。

≪高齢化社会視察調査団に参加して≫（1）

スウェーデンの女性

Women in Sweden

農林漁業団体職員共済組合　企画部長　竹　原　甲　三

Mr. Kōzō Takehara

スウェーデンの訪問先での説明者は殆んど女性であった。私は、それらの人たちから要領のよい説明とてきぱきした応答を聞いて、内心一驚すると同時に感心もしたところである。

スウェーデンでは、現在16歳から64歳までの女性のうち75%（男性は88%）が何らかの形で就業しているという。その背景には、人口が少ないことによる労働力の確保や男女平等の理念もあろう。そして、最も大きな理由は老親は働けなくなれば社会が扶養する仕組みになっているという、その社会体制なのであろう。かの国にいる日本人女性が退職するにあたって、その理由を「老親（夫の母）と同居して世話するため」と述べたところ、スウェーデン人たちは一様に、その理由を「全く理解できなかった」という記事を読んだことがある。

子供たちは18～19歳になれば親元を離れて別居し独立するのが一般的であるということである。日本でも、最近は親元を離れて都会で家庭をもつ者が多くなっているが、それでも同居率はまだ高いし、親と子供たちとの触れ合いの期間も長い。

このことと女性の職場進出とは必ずしも関係があるわけではないが、かの国では、女性が核となって生み出すべき家庭や親子関係はどうなっているのであろうか、親子の断絶が深まり情緒が薄らぐようなことはないのであろうか――スウェーデンの女性たちに敬意を捧げる一面で、またお世話になった方々にはたいへん失礼とは思いつつも、ふとそんな疑問も覚えた次第である。

＜翻　　訳＞

高等教育との結婚(1)

A Marriage to Higher Education

ストックホルム大学名誉教授　トールステン・フセーン
Prof. Torsten Husén

スウェーデン社会研究所および日瑞基金と極めて深い関係にあるストックホルム国際教育研究所長兼ＩＥＡ（国際教育達成度評価学会）名誉会長のＴ・フセーン教授は、今夏停年退官により名誉教授となられた。その永年の研究生活に関する文献的自叙伝の翻訳権を当研究所に下さったので、以下数回にわたって連載することにする。スウェーデンのみならず北欧を代表する世界的学者の社会研究の旅路から、われわれが示唆をうけるところは少なくないであろう。（編集部）

大学との初期のかかわり

少くとも若い時に、学問の世界で学識と声価の頂点にあるとみなされているもの、すなわち教授になりたいというあこがれは、私の人生の早くから芽ばえていたように思われる。私の家族には学者はほとんどいなかった。父は、1880年代に僅か数百日間の初等教育を受けたに過ぎない農夫であった。母の父は、1875年に大学入学資格試験に合格し、また彼の二人の息子、つまり母の異母兄弟たちはそれぞれ博士号を取得し、とくに兄は1927年にストックホルム大学で、グンナル・ミュルダールと時期も学部も同じであった。母は、その学位が授与されるに当って、シティー・ホールでの厳粛な儀式に出席することを得た。彼女の生き生きとした想像力によって色どられた話と新聞記事によって得られた知識とによって、そのことは私に深い感銘を与えた。われわれの多くが高等学校においてもつ大学とのかかわりは、大学入学資格試験の時に実現した。

いわゆる検閲官の大学教授は、一定水準が維持されているかどうかを確めるために政府から任命されていた。彼らは個人的に、厳かな行事である口述試問に参加していた。私は、高等学校を卒業した1935年に、二番目に古い国立ルンド大学（1668年創設）に入学した。これは経済的不況の最中のことであった。当時、スウェーデンの当該年令層のわずか２％しか高等教育に進学していなかったが、なおかつ多くの大学卒を社会に送り出していると考えられていた。今日〝過剰教育〟と呼ばれている危険が隅から好機を狙っており、知的プロレタリアートが形成されることを、人びとは恐れていた。進学爆発およびエリートのためのものから大衆のためのものへの高等教育の移行と巨大な収容力を持つ労働市場の出現というわれわれの経験からすれば、そのような問題の調査、および概して哲学部のように広く開かれ定員制をとることもなかった諸機関への入学を制限することについて勧告を提出するための王立審議会が政府によって任命されたということを想像することは到底困難である。またそのような経験があったとすれば、人びとは高度に教育される者の〝必要性〟の予測を試みようとすることに対しては懐疑的な態度を取ることは避けられないことであった。

高等学校では精励の甲斐あって、最優等の成績を収めたことから、非常に選抜が厳しく、それゆえ名声の高い専門大学を志望するものと考えられていた。医学には魅力を感じなかったことや理数科コースをとったこともあって、非常に選抜が厳しいストックホルムの王立工科大学を志望することを余儀なくされた。しかしながら工学にもまた魅力を感じなかったため、少くとも10倍の志願者の中から20数名だけが選抜されていた化学科を志願することになった。私の志願証明には実習経験が含まれていなかったが、少くとも数学や理科などの成績はきわめて優秀であったのであえて出願したが、その結果は不合格であり、私はそれによってひそかな満足感を味わった。というのは、私の興味は主に人文・社会科学の方面、すなわち哲学、心理学、文学、歴史学、社会学等に向けられていたからである。私は世界観を探し続け、そしてこれらの学問研究の努力において何らかの指導を期待していたのであった。

ルンド大学では、私の指導教員はヨハン・ランドクウィスト教授であった。彼は、心理学・教育学講座の主任であり、スウェーデン最後の偉大な博学者たちの一人であり、ほかにもそうした数人から幸せにも教えを受けた。学部学生として歴史学、心理学、文学について学び、大学院の歴史学専攻課程に進んだ時、心理学助手の地位を与えられた。私はその当時、自分の純粋な関心であると感じていたことを、後にそれが教養教育であったことがわかったのであるが、それを追求した。文部省の学生奨学金委員会の実務家たちは私に少くとも既存の職業のための僅かな機会に向って用意すべきである、つまりそれは中等学校教員を意味したが、その課程をとることを強く勧めた。すなわち歴史とともにスウェーデン語を教える資格を正式に与えられるためには文学修士課程に北欧言語と文学を加えることを促された。

13年間にわたる極度に構造化された学校の圧し着せから、〝自由〟な大学生となったことは、興奮を伴う経験であった。というのは、第一級の高等学校が提供するものよりもはるかに卓越した、大学で用意している莫大な知的バイキング料理から選抜する自由があったからである。
しかしながら〝自由〟とは、単に選択の自由だけではなく失敗の自由をも意味した。いわゆる自由学部に登録した学生の半数弱は、よしたとえ一部のものが学士号取得を意図せず、ただ単に大学院の一つに入るために準備するに過ぎなかったにせよ、幾分要求があり構造化されたプログラムである基礎的学位である学士号や修士号を取得することができなかった。

われわれが保持していた自由とはどのようなものであったろうか。まず、講義もしくは演習に出席する必要はなかった。私立のストックホルム大学では、このことは極端であった。誰もが自宅で勉学することを公式に認められ、十分に知識を得たと判断した時、ただ名簿に登録し、試験を受けることを要求することができた。しかしながら実際には、そのような極端な例はまれであった。誰もが数学や英語のような学科を１度に１つずつ学んだが、しかし特定の領域を履修する時間には制限があった。１つあるいは２つの付加学期が必要とされる大学院課程の学科目履修に向けての第１段階をとるのでなければ、理想的時間は１学科につきほぼ１学年であるといわれていた。〝全日制〟学生は、通常４～５年間で学士号取得の要件をみたす３学科を組み合わせていたために、１学科につき３つの学期をあてていた。

試験は、当時、実際には、教授宅を訪れた学生に対する口述試験という形で１年に一度行なわれた。これは、講座主任が１年につき20名そこそこの新入生しか期待せず、しばしば実際にはこれを下まわっていたという小規模のもとでのみ可能なことであった。歴史学の講義の最初の学期に、私は次の第２学期に講読される文献の目録に関する要件で教授を訪れた。私は、その大部分が外国語であった約8,000ページから成る目録を持参した。当時、指導や講義の助力なしに独力でそれを読むものと考えられ、１年以内に口述試験のために教授を訪れることが期待されていた。ときにプロゼミナールと称されていた演習は、１週間に一度主任教授によって指導されていた。２学期あるいは３学期に、とりわけ印刷された資料、参考文献、あるいは学術論文の中に独自の方向を見出し、そこから各自のささやかな〝研究〟を導き出すことが期待される主題をもった論文を、誰もが用意すべきものと考えられていた。加えて、もしも望むならば、主任教授が関心を寄せているトピックについての講義に誰もが参加することができた。たいていの場合、教授は自身の研究についての講義をしたが、ときにそれは単に先年に行なわれた一連の講義の繰返しにすぎないものであった。

私の最初の小さな独創的な研究は、専攻科目履修のために必要とされる文学に関する論文を用意している中になされた。それは、フランスの臨床心理学が、シグモント・フロイドと同時代の1880年代にパリに住んでいたスウェーデンの劇作家アウグスト・ストリンドベルイにどのような影響を与えたかについての研究であった。文学領域における私の指導教授は、学術雑誌にその論文を載せるための準備をすることを勧め、それは1940年に刊行された。これは、発見の興奮を味わせてくれた経験の最初の一つであった。

学んだことの多くは、もちろん非公式的な偶然的なものからなっている。少くとも、ある人の世界観にしばしば関連していることがらについての夜毎の論議の場での仲間たちとの接触の中で得られたものが少なくない。大学での学科の中には、夕方の講演とそれに続く討論を用意している学術協会やクラブがあった。学部学生時代、これらの会合、少くとも哲学クラブの会合は、私の学問に関する教育経験の重要な部分を占めていた。私は今なお、ニールス・ボーアがコペンハーゲンより

やって来て、あたかも終りのないような因果律に関する彼の思想から溢れ出た1938年3月のある夕べの独白のような、思い出に残る会合についての生き生きとした記憶を保持している。

上述したように、このことは小さな規模の中でのみ可能なことである。学部学生時代、面積からして、また心理的にも小さく、3万人そこそこの住民からなるルンド市にあった4つの学部に登録されていた学生は僅か約2,800人に過ぎなかった。当時の大学生活の他の特色は、いくつかの社会科学系列からなる人文学部を支配していた学者のタイプにあった。当時は、過度に専門化の進む時代以前にあり、特定の問題領域に関する深みのある研究をいとなむ能力と多面性を有する世界的な展望を結合させている卓越した博学家を見出すことができた時代であった。私の指導教授ヨハン・ランドクウィストは、54歳の時に心理学と教育学との合同講座主任に任命されていたが、その頃心理学は、依然として学部において種々の論議をかもし出したものであり、理論哲学の一部門であると正式には考えられていた。彼は、すでに哲学および文学の主任教授に就任する用意があると明言していたという注目すべき経歴の持ち主であった。人文科学に関する幅広い学識とウップサラ大学より授与された哲学博士号によって、彼は、自由寄稿家、ジャーナリストの道へ入っていった。彼はアウグスト・ストリンドベルイ作品集の編集をしたり、スウェーデンの諸作家についての論文を書いたりもした。哲学者として彼は、心理学および文学の研究において〝説明〟にかわる〝予解〟に向けて探査しつつ、ウィンデルバント、ディルタイ、ベルグソンの伝統を明らかにした。また彼は、スウェーデンにおける文学分析にフロイド学派の精神分析の手法を導入し、文学的シンボルおよび解釈についての新な認識論を展開した。彼は、1930年代にヨーロッパおよびアメリカの心理学界を支配し始めた経験志向的実証的実験心理学の素養を全くもたない、典型的な人文科学に関する博学家であった。技術的な観点から見た場合、彼は、どのように大学の学者は〝ルーズな〟教師たりうるかということの見本であったが、しかし同時に彼は、学生たちに強い衝撃を与え、大いなる心酔を呼び起こしていた。彼の講義は、しばしば厳密な説明の枠組が欠如している良くない構造の独白であった。彼は、自らが扱っているトピックに夢中になりながらも、それに対する意見を聞く用意をも備えていた。通常彼は、彼より学識の低い学生から予告なしに発せられる指摘をまじめに取り上げた。彼が講座主任であった11年の間、彼の学生が独力でわれわれの学問における専門的事項を学ばねばならない時に、また彼は、次の世代でスウェーデンにおける彼の専攻領域を支配することとなる大学院生をひきつけることができた。

教育心理学への転換

私は歴史学および心理学（それに加えて数学）を専攻したことによって学士号を取得し、大学院の歴史学の演習に参加し始めていた。中等学校教員の資格を得るために私は、北欧言語・文学についても学び始めていた。しかし私は、ランドクウィスト教授と接触を保つとともに彼の演習にも参加していた。

ある夕遅くのこと、中世のスウェーデン語に親しむために使用していた教科書である1350年のスウェーデン一般法を解読中、そしてそれは言語学者となることを希望しない学生にとっては、さほど楽しい勉強ではなかったが、ランドクウィスト教授は私を電話で呼び、彼の助手になるよう私に要請した。その職務は、修士号取得のために必要な課程を取る学生にとっての教育での（筆記）試験の採点を手伝うこと、および心理学を専攻することを望む学生のために必要であった実験心理学課程に対して日常の責任を負うことからなっていた。ランドクウィスト教授自身は、実験心理学の何らの背景をも持ち合わせておらず、その分野における他のいかなる経験的技術についてもふれるところがなかった。

その申し出は、私の大学での研究の分岐点を意味していた。仮に成果があがれば高等学校の講師となる資格を与えてくれる歴史学の演習の参加を継続する代りに、私は仕事の将来性が非常に不明瞭な領域に転換することであった。通常非常勤であったが、2～3年間の教職経験を持つ初等学校教員の幾人かが管理職につく資格を得るため大学院課程に登録していた。彼らは〝視学官のために勉強している〟と、われわれは冗談めいて言っていたものである。これに反して、私は、助手として生計を維持するに十分な給料を与えられることになれば、もはや貸与奨学金に頼る生活を強いられることはなかった。翌朝学部で会うことになっていたこともあって、ランドクウィストは、それについて考慮するための一夜を与えてくれたが、まんじりともしない夜を明かしたのち、私はその

申し出を受けた。

1938年夏、私は心理学界の状況を知るためにいくつかのドイツの大学を訪れる機会を得た。ランドクウィスト教授が高い評価を与えていた構造的、機能的、人文主義的心理学において指導的立場にあった老教授フェリックス・クルーガーがいるライプチッヒ大学を、私は選択した。しかし、大都市で一夏を過すことを望まなかったことや、そのうえライプチッヒ大学から私の出発日時に関する回答が来なかったこともあって、私の世代の好奇心をそそっていた類型学で知られるエルンスト・クレッチュマーが大学の精神病学教授と精神病院長をしているマールブルク大学へ行くことにした。そこでは、エーリッヒ・イェンシュが心理学教室主任を勤めていたが、ドイツ心理学会長をつとめた彼がナチスの一員であったことを、私はそこに行くまで知らなかった。こうして、マールブルク大学訪問は、ある意味で誤った選択であった。しかし他方では、マールブルクは、1,000人あまりの学生と親密さおよび伝統の空気にみたされたよき小さな大学都市であった。

ウイーンの心理学研究所訪問も加わったドイツ旅行は、大戦勃発以前における高等教育に関する私の国際的経験として有意義に終えることができた。（'Journal of Higher Education '1980, Vol. 51, No. 6 より中嶋　博訳）

カーリン・アンダーソン女史の来日

State Minister Karin Andersson in Japan

スウェーデン現内閣の移民、平等問題担当大臣カーリン・アンダーソン女史（中央党）が9月上旬来日された。女史は、スウェーデンの男女平等問題についての講演や、日本女性との討論や、日本の労働市場における女性の地位の視察など、一週間の滞日期間中を、意欲的に各地を巡られた。

9月9日、スウェーデン大使館における女史のワークショップには、当研究所から丸尾、小野寺の両名が招かれ、直接に女史の抱負を聞くことができた。

女史の話の要旨は次のようなものであった。男女平等の根本思想は、男女は人間としての価値が平等であること。また平等になる可能性をもつということである。それには男女が、1）教育を受ける権利、2）育児の責任、3）社会発展の平等を主張しなければならない。

当面の目標としては

1）法律をもって性別による雇用の差別を禁止すること。

2）基礎づくりをすること。

3）世論をその方向にもっていくこと。

が挙げられる。

スウェーデンでは、1980年に男女平等雇用法が施行され、平等オンブズマンも設置された。現在、15才から65才までの女性の75%は就労しているけれども、男女雇用の平等はまだまだ達成されていない。実際問題として男女雇用の平等を推進するには、保育所の増設と父親の家事育児への協力が必要である。60～70年代に保育所は大幅に増強されたが、まだ需要の半分しか充されていない。父親の育児については出産に伴う12ケ月の両親手当の制度では、父親はまだ11%しか利用していない。8才以下の子持ちの親には30時間労働の権利が認められているが、主として母親がこの権利を行使している。小さい子供を持つ母親の就職率は女性全体の就職率と同じく75%であるが、雇用の平等からはまだまだ程遠い。

男女平等委員会はその任務の一つとして新しく世論づくりを挙げて、古い伝統に取組み出した。

≪研究会ニュース≫

第3回　社会政策研究会

9月26日（土）当研究所監事大木彬彦氏により、「オンブズマン国政査察」という研究会があった。今や世界的に有名になっているオンブズマン制度の、原点であるスウェーデンのオンブズマン、オンブズマンのうちでも最もオリジナルである議会オンブズマンについて、造詣深い同氏の説明は明快かつ有益であった。　（小野寺）

昭和44年12月25日 第三種郵便物認可
スウェーデン社会研究月報 昭和56年10月号 発行 第13巻 第10月号 毎月1回25日発行 編集責任者 堀内 [illegible] 発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 定価 二〇〇円